

ハールメンにおまかせ

脚本・演出
矢尾板 俊平

キャスト

ハールメン

ウィリアム市長

カール神父

シュバット老人

ユーミ先生

アラキルト博士

リーベルト大佐

村人 A

村人 B

メッシュ

レイベント

フィッシュ

ハールメンにおまかせ

第一幕

(チャルメラの笛の音が、だんだん大きく最後には劇場いっぱいに鳴り響く。)

(照明、スポット)

ハールメン「この音が鳴り響くとき、世界中の子どもが泣きやみ、この音を歓迎する。この音が聞こえたとき、あたかも救世主が誕生したかのように、祝い喜ぶ人々がいる」

(照明、中心から拡大)

(照明全体的に薄暗く。)

(舞台には、市長と村の大人たちがいる。それぞれが腕を組んだりして、考え込んでいる)

村人 A「もうどうしようもない、何も解決策が思い付かないじゃないか。オラたちになにが何ができるんだ。何もできないじゃないか。市長」

村人 B「この異常事態は、何が原因なんです？市長」

村人 A「子供たちが次々に悪魔に連れ去られ、今度は大人までもが、死んでいく。どうしたらいいんですか、市長」

村人全「市長！」

(村人を振り払って)

市長「うるさーい、何が市長だ。市長、市長、市長...、私だって人間なんだよ。魔法使いでもないし、神様でもない。」

カール神父「当たり前じゃないか、市長あなたが神というならば、それは神への冒瀆である。あなたのような俗世間的な好色男が。」

市長「神父、誰が好色男だ。えー、いつ私が罪を犯した。あなたこそ、神父とはいえないハレンチなことをしたじゃないか。」

シュバット老人「これこれ、止めなされ。市長も神父も。みっともない。」

(老人が市長と神父の間に入る)

神父「こんな市長、次の選挙で落選させてやる。」

(市長、神父に再び歩み寄る)

市長「ああそうか、わかったよ。はい！村人のみなさん聞いてください。このカール神父は、先日の市議会議員慰労旅行会のと、あえて、あえて女体盛りを懇願いたしました。私は反対したんですよ。神父のそのときの顔と言ったら、もう」

村人 B「いやねーハレンチ」

(神父は舞台の片隅で)

神父「自分だって、先日、市議会庁舎の入札業者と抱きパブに行ったくせに。」

(村人 E が神父に歩みよって)

村人 A「えー、市長が抱きパブとノーシャブに行ったって？」

(村人全員が神父に走りよる)

神父「そうなんですよ、しかもね、俺は市長だ！文句あっかって、ホステスの女の子と隣のシブヤマルヤマに消えていった。」

博士「シブヤマルヤマは、時代考証とか、ここ一応ドイツの設定なんで厳しいかな。」

(神父が市長に向かって)

神父「あれは雨が強い夜だった。一人の中年の男性が告解室に訪ねてきた。な、なんと、その男は村の女子高生と！」

(舞台中央で突然)

ユーミ「あの、みなさん、今はそういうことを暴露するときじゃなくて、子供たちや私たちの命を奪っていく原因を考えて、対策を話し合うときだと思うんです。」

老人「その通りじゃ、市長、神父。今はお互いの政略を張り巡らすときではない。」

(市長、中央に走ってきて)

市長「そ・その通り！、よく言って下された、ユーミ先生。みなさん、私たちの大切な子どもたちの命を奪う悪魔の正体を暴き、自由と平和を取り戻そう！見てみなさい、神父！あの地平線を！あの彼方に真実の都がある。」

神父「自衛隊のポスターみたいに肩を抱くのはやめてくれ！あそこに、猿と豚と河童をつれて、経典でも取り行くつもりなのか？ガンダーラ・ガンダーラって」

(市長、メガネを直しながら)

市長「神父くん、まじめにしたまえ。今は、おちゃらけている場合ではない。村人のみなさん、集まってください。」

(舞台、暗転。メッシュ、レイベント、フィッシュが上、中央、下に分かれて座っている。)

メッシュ「なあ、博識のフィッシュくん。悪魔の正体はなんだと思う？」

フィッシュ「俺の予想は、伝染病だろうな。しかも、ネズミが媒体となったね。それが、一夜のうちに俺達の魂を吸い取っていく。」

レイベント「だけど、お前の予想って当たったことないよな。この前のドッグレースだって。あれで、今月の小遣いパーアーだよ。ミチルだって、俺のことすきでなかったし。全く恥じかいちゃったよ。」

メッシュ「予想といっても違う意味だけだな。」

レイベント「ああ、早く隣町に遊びに行きたいよ。このごろたまっちゃてさ。」

フィッシュ「何が？」

レイベント「フィッシュくん、H。ストレスだよ、ストレス。自由になりたいよ。」

(チャルメラの音、ハールメン、上手から登場)

ハールメン「人間とはあたかも、翼を失った墮天使さ。少年たちよ、自由とは自分から手に入れるものさ。」

メッシュ「おじさん、醤油ラーメン一丁。」

レイベント「俺はミソね。」

(ハールメン、メッシュとフッィシュを突っぱねる)

ハールメン「ふざけるなー。(怒鳴る、息が続く限り)はぁはぁはぁ。私はハールメン」

レイベント「じゃあ、そのはーるメンでいいや。腹へっているから超特急ね！」

(ハールメン、レイベントを突き飛ばす)

ハールメン「ふざけるなー。(怒鳴る、息が続く限り)はぁはぁはぁ。私はハールメン。」

メッシュ「じゃあ、塩でいいよ。おじさん。」

(ハールメン、メッシュを突き飛ばす。)

ハールメン「ふざけるなー。(怒鳴る、息が続く限り)はぁはぁはぁ。三回目になると厳しいし、お客さんも飽きるぞ。もうぼけるなよ。私の名はハールメン。天才医師だ。いしといっても、石じゃないぞ、医者だぞ。それも多分、お前たち、ぼけるから、先に言っておくが、性病科専門の医師ではないぞ。私はジブシー医師。つまり、世界中の病気で苦しむ人を救うために旅する医者だ。どうだ、偉いだろー。」

(フィッシュ、立ち上がる)

レイベント「あの、ジープが見当たらないんですけど。」

ハールメン「ふざけるなー。(怒鳴る、息が続く限り)はぁはぁはぁ。声が枯れてきた。この中世ヨーロッパにジープがあるわけないだろう。よく時代考証考えろ！」

フィッシュ「ハールメンさん。」

ハールメン「なんだ、お前も何かぼけるのか？」

(フィッシュ、ハールメンに歩み寄る)

フィッシュ「天才ドクターのあなたに診察依頼をします。」

ハールメン「ふ・ざ・け・る・(怒鳴る、ゆっくり)なんだってー？」

(舞台暗転、市の大人たちの会議に戻る。)

市長「シュバット老、あなたの長い人生経験の中で、このような悪魔が現れたことはあるのか」

老人「わしの長い人生経験といっても、この街から出たことがないのでな、よくわからんが、この街ではなからう。人生経験、といえば、わしのプレイボーイ列伝でも話そうかのう。」

市長「今はあなたの恋の遍歴なんて聞きたくない。」

(市長、上へ。神父、下から中央へ)

神父「その通り。今論じるべきは、市長のSEX 疑惑について。あなたは葉巻でどんなプレイをしたー。」

(市長が神父を睨めつける)

市長「神父、あなただって自分の秘書に「まあ、いいじゃないか」とか言いながら、セクハラをしたくせに。ああ、これが聖職者のあるべき姿なのか...アーメン」

(市長と神父が中央に歩みより、にらみ合う)

神父「神よこの哀れな男を許したまえ。アーメン。」

市長「その前に自分を許してもらいなさい。」

(ユーミが二人の間に割ってはいる)

ユーミ「市長さんも神父さんもなんでそんなにけんかばかりするんですか？今はそんなときではないでしょう。もっと真剣に考えてください。」

博士「この悪魔の正体。私の分析の結果、伝染病ではないかと。ただ、この伝染病の感染ルートが不明である。食物からの連鎖なのか、それとも性行為なのか」

ユーミ「伝染病だとしたら、小さな子どもまでもが感染しています。つまり、性行為感染ではないのではないのでしょうか。」

市長「わからんぞ、ここにロリータの性もとい聖職者がいるからな」

神父「なんだと」

(再び、市長と神父にらみ合う。そして何か言い合っている)

博士「そうですね。性行為でなければ、空気感染か...」

老人「しかし、この街は街道から離れており、旅人も少ない。何が病原菌を運んだのか。」

ユーミ「もしかすると、その辺がはっきりすれば、悪魔を倒せるかもしれませんね。」

(ドアが開き、閉まる音)

(村の大人全員が下手をみる)

フィッシュ「こちらです、ハールメン先生」

ハールメン「お邪魔しますよ」

(ハールメン、メッシュ、フィッシュ、レイベントが下手から入ってくる。)

市長「誰だ、あなたは」

(ハールメンに言い寄る)

ハールメン「私の名はハールメン。ジプシーの」

神父「旅人だー。伝染病を運んできた悪魔だー。」

(市長が村の大人たちのいる上手に走って逃げる。)

神父「悪魔よ、去れ。悪魔よ、去れ。」

フィッシュ「神父さん、違いますよ。この人は悪魔どころか救世主。メシアですよ。」

(市長が再び、ハールメンに歩み寄って)

市長「そうか、飯屋か。そうだな、サバの煮込み定食を頼む。おばちゃん。」

ハールメン「ふざけるなー。(怒鳴る、息が続く限り)はぁはぁはぁ。私は飯屋じゃない。医者だ。世界中の病気で苦しむ人に希望と勇気、そして笑顔を与えるために旅するジプシー医師だ。」

市長「それで、その医者が何しに来やがったんでい！」

(ユーミが博士と老人に向かって)

ユーミ「おじいちゃん、博士、この人ならば伝染病の原因がわかるんじゃない？それで、解決してくれるんじゃないかしら！」

博士・老人「そうだ！」

(博士と老人がハールメンに歩みよる)

老人「この街を救ってくだされ。先生。」

博士「この街は伝染病という悪魔に犯されています。どうか、先生お力をお貸してください。」

ハールメン「大体のことはこの子供たちに聞いています。私もその悪魔を倒すためにやってきたんです。」

(市長と神父を除く村の大人たちがハールメンの近くにひざまづく)

ハールメン「みなさん、立ってください。私は力は貸しますが、悪魔によって拘束されている自由を解放するのは、みなさんの手によってしかできません。自由も平和もそして愛も自分から手に入れようとしなければ、真実は見つからない。いつのまにか感じられる自由は、人から与えられている自由は偽物です。さあ、その幻影を打ち破り、本当の自由を手に入れましょう。」

(市長と神父を除く村の大人たちが狂喜の叫び声を挙げる)

市長「おいおい、ちょっと待て。街の衆も待ちなさい。ハの字、あなただって医者を職業としているんだ。診察料をとるんだろう。いくらだ。いくらほしい？」

ハールメン「確かに私にも今後の旅の資金が必要だ。本来ならば、診察料はとりたくないのだが、今でも世界中のどこかで苦しむ人のための費用として、ドル換算で2万ドル」

市長「2万ドルか。」

博士「それでは早速、先生お願いします。」

(市長と神父を除く村の大人たちと子どもたちがハールメンとともに、下から出て行く。)

(照明、市長と神父にスポット)

市長「2万ドルか。」

神父「いい方法がある。」

(神父が市長に耳打ちする)

(二人とも怪しい笑い)

市長「神父、おぬしも悪よのー」

神父「市長ほどではございません。」

市長「この生臭僧が。はっはっは。」

(二人の笑いとともに、暗転)

(暗転中、そして薄暗くスライドで悪魔を映し出す。声のみ)

ハールメン「悪魔の原因は、ネズミだ。ネズミが媒体となって病原菌を運んでいる。すべて、焼き払え！また、遺体も病原菌の感染源となっているかもしれない。火

葬は死者への冒瀆にはならん。街中の遺体を集めて火葬するぞ。」

(照明薄暗く、炎のイメージ)

(ハールメンの指揮に村人が働いている。)

(ネズミの親玉が倒れ、悪魔が消えていく。)

(照明、暗転)

(音響なし。静寂)

(間)

(照明明るく。)

(市長と神父を除く村の大人たちと子どもたちが狂喜乱舞。ハールメンも笛を吹いている。)

老人「ありがとう。先生」

博士「私たちは助かった。」

ユーミ「ハールメンさん、本当にありがとう。」

子供たち「ハールメン、ハールメン」(合唱)

(市長と神父が上より出てくる)

(ハールメンを除く、おとなたち、こどもたちが下より退場)

ハールメン「市長さんに、神父さん」

神父「ハールメンくん、よくやってくれたね。」

市長「これが礼金だよ。」

(市長、ハールメンに封筒を渡す。)

(ハールメン、封筒を開ける。)

ハールメン「なんですか、これは。約束と違うじゃないか。」

市長「君、2万ドルという法外な値段払えるわけがないじゃないか。」

ハールメン「しかし、2万ドルの約束で、私はこの仕事を引き受けたのです。」

神父「市長は、YES とは言っていないはずだ。つまり、これは君のボランティア活動ということになるんじゃないかね。」

市長「それじゃあなんだから、こうして気持ちばかりの礼金を払っているのだ。君の診療も善意で、この礼金も善意なんだよ。」

ハールメン「話が違う。次の街で医療活動するためには、お金が必要なんです。2万ドルじゃなくても、1万ドルでもいい。」

(市長、ハールメンの肩に腕をまわして。)

市長「私だって鬼じゃない。君が必要ならば、君の医療活動を援助しよう。しかし、条件がある。2万ドルのうち、君は1万ドル、市長である僕と神父とが5000ドルずつということで、話をつけようじゃないか。」

ハールメン「リベートですか...」

市長「声が大きい。」

神父「君にとってもいい話だと思うんだが。」

(ハールメン、市長の腕を振りほどく)

ハールメン「ふざけないで下さい。私はあなたたちの不正の片棒を担ぐつもりはありません。どうしても、この 200 ドル以上支払わないならば、私にも考えがある。次の街は天然痘に苦しむ街だ。天然痘治療に必要なものを 20 万ドルから 200 ドルを差し引いた 19 万 9800 ドル分頂いていく。」

市長「天然痘治療に必要なもの？」

神父「勝手にするがいい。貴様が 200 ドルでいいなら、さらにふたりで私たちは 9 万 9800 ドルの金を得られる。」

ハールメン「市長、神父。後悔することになりますよ。」

市長「貴様になにができる。」

(市長と神父が高笑い。ハールメン下から退場。)

(下からユーミがでてくる。)

ユーミ「大変だわ、何をするつもりなのかしら。ハールメン様は、天才医師。いえ、悪魔を倒した救世主。人知を超えた力を有する方。...」

(舞台暗転)

(チャルメラの笛が鳴り響く)

(第一幕 終了)

第二幕

(舞台徐々に薄暗くなる。)

(舞台には、市長と村の大人たちがいる。それぞれが腕を組んだりして、考え込んでいる)

村人 A「もうどうしようもない、何も解決策が思い付かないじゃないか。オラたちになにが
何ができるんだ。何もできないじゃないか。市長」

村人 B「私の子どもを返して、市長」

村人 A「子供たちが次々に悪魔に連れ去られていった。どうしたらいいんですか、市長」

村人全「市長！」

(村人を振り払って)

市長「うるさーい、何が市長だ。市長、市長、市長...、私だって人間なんだよ。魔法使い
でもないし、神様でもない。」

神父「当たり前じゃないか、市長あなたが神というならば、それは神への冒瀆である。あ
なたのような俗世間的な好色男が。」

市長「神父、誰が好色男だ。えー、いつ私が罪を犯した。あなたこそ、神父とはいえない
ハレンチなことをしたじゃないか。」

ユーミ「あなたたち、また同じことを繰り返すのですか？いつもいつも問題があると、誰
も責任をとろうとしないで。市長と神父はいつも何か起きるとお互いの悪口を言い
合って。これじゃあ、問題の解決なんて不可能よ。」

神父「今回の問題の原因はわかっている。ハールメンだ。彼が身代金を目的とした営利誘
拐だ。」

市長「ハールメンのやつ。2万ドルじゃ足りないのか。悪魔はあいつの方じゃないか。そう
か、あのネズミもやつの手先。つまりは、ハールメンが一番の黒幕ということさ。」

博士「2万ドル払ったのは事実なんですね。」

市長「当たり前だ。約束を守ったよ。」

老人「しかし、あのお方が。」

(鳩時計が6時を伝える)

市長「大佐！朝6時に市長より発令する。すぐにハールメンを逮捕し、わが街の子どもた
ちを取り戻せ！」

(大佐が下より入場する。)

大佐「YES、Sir、必ずやご期待に添えるよう。」

市長「大佐よ、期待しておるぞ。この重要な任務を達成したときは、報奨を与えよう。」

大佐「はっ。」

(大佐が、下から退場する。)

市長「まずは、ハールメンを逮捕してからだ。」

(市長、神父、博士、村人 A,B が上より退場)

ユーミ「違うのよ、おじいちゃん。ハールメン様は誘拐したんじゃないの。全て、市長と

神父が原因なのよ。」

老人「ユーミ、くわしく話してごらん。」

(舞台暗転)

(舞台暗転中)

大佐の声「見つけたぞ、ハールメン。市長の名において貴様を逮捕する。」

ハールメンの声「予想はしていたが、早かったな。」

子どもたちの声「ハールメンさーん。」

(効果音)

(静寂)

(舞台、徐々に明るくなる。)

(舞台にはハールメンと村のおとなたちがいる。ハールメンは縄で縛られている。)

市長「ハールメン、貴様が悪魔の黒幕だったとはな。」

(ハールメンを殴る。)

ハールメン「何のことだかわからないな。」

市長「今回のネズミ騒動、すべてお前の自作自演の芝居よ。」

神父「好きな女の子を友人に襲わせて、危機一髪のとときに、飛び出して救い、自分にほれさせる手法と同じですな。」

市長「神父は、そうやって今の奥さんと結婚したんだ。冥土の土産にしろ。」

神父「市長は、目薬を使い、子をはらませ、その子どもに罪はないといって、無理やり結婚したんだ。」

博士「そんな市長と神父の話はいいですよ。問題はハールメンがなぜ営利誘拐をしたかってこと。」

ハールメン「営利誘拐だと？」

博士「君が申し出た2万ドルは市長が支払ったとっている。それだけじゃ、足りなかったのかい。」

ハールメン「2万ドルなんてもらっちゃいないよ。」

市長「ウソを言うな。きっちり2万ドル、払った。」

神父「私が証人だ。」

ハールメン「市長と神父はリベートを要求してきた。最初に200ドル渡され、1万ドル欲しければ、リベートをよこせてな。全てを合計して、2万ドルになるようにな。」

市長「何を言っているんだ。ついに頭がおかしくなったか。」

(ユーミが中央に出る)

ユーミ「私聞きました。その話。みなさん、ハールメン様の言っていることは本当です。

そして、ハールメン様は不正はできない。だから、残りの19万9800ドル分のあるものをもらっていくと。次の街が天然痘に困っているのです、その天然痘医療に必要なものをと。」

神父「実際に街の金庫からは、2万ドルが無くなっている。詭弁だ、ユーミ先生。」

市長「なぜ、天然痘の治療に子どもたちが必要なんだ。」

ハールメン「この街の子どもたちは、天然痘の菌を持っている。天然痘は一度かかってしまえば、再発しない。そこで、天然痘の菌を植え付けてあげることで、天然痘による死を予防することができるんだ。」

(博士がふっと気がつく。)

神父「詭弁だ。村の人々よ、市長とこの神父。または、ハールメンと若先生どちらを信じる。」

市長「ハールメンの処刑を明日執り行う！」

(博士、老人以外の村の大人達が、狂喜乱舞。)

(ハールメンが動き回る。)

神父「この処刑は神の名のもとに執り行われるであろう。」

(ユーミが倒れ、老人が世話をする。)

(ハールメンもうなだれる)

(舞台暗転)

(照明、スポット)

(ハールメンとユーミのみ舞台にいる。)

ハールメン「もう全て終わった。何もかも。私を待っている人々に申し訳がない。」

ユーミ「私はあなた様を尊敬いたします。あなたは死んではいけない。世界の生けとし生きる者たちのためにも。」

ハールメン「しかし、市長と神父が2万ドルを着服したという事実が明らかにならない限り、明日、私は死ぬ。」

(博士が出てくる)

博士「ハールメン先生。私はあなたを信じることにする。天然痘に対する治療法はセオリー通り。あなたの言うことが正しいと思えるのです。」

ハールメン「そうか...私が死んだら、君に私の医学書をあげよう。私の代わりに世界の子どもたちを助けてあげてくれ。」

博士「ハールメン先生、明日の朝までに、あなたの無実を証明してみせます。」

ハールメン「ありがとう。期待しているよ。」

ユーミ「ハールメン様、世界の子供たちの為にも生きることをあきらめないで。」

ハールメン「ありがとう。ありがとう。」

(舞台暗転。)

(舞台明るくなる)

(大佐、兵隊A、ユーミ、博士、以外の村の大人たちがいる。)

市長「これより、罪人ハールメンの処刑を開始する。大佐！罪人をここへ。」

(大佐、兵隊A、ハールメンが下より入場)

神父「ハールメンの罪状は、営利誘拐。神の名のもとにおいて、罪人を処刑する。最後の情けとし、この者の御霊が神のもとにたどり着くことを祈る。」

市長「大佐、罪人を処刑台へ。」

(大佐、ハールメンを処刑台に連れて行く。)

市長「ハールメン、何か言うことは？」

ハールメン「真実はいつの日か、陽のあたる場所にさらけ出す！市長と神父、待っていますよ。」

(ユーミ、下より飛び出してくる。老人がゆっくり登場)

ユーミ「待って下さい。みなさん、もっとよく考えて。ハールメン様が悪魔ならば、最初から私たちを奴隷にして、金品を奪い取っていったはずです。街を救うなんて面倒くさいことなんてしないで。」

(市長、神父以外のおとなたちがざわつく。)

老人「そしてなぜ、市長と神父はこんなにまでも、処刑を急ぐのだ。ハールメンに弁解の余地を与えてもよいではないか。これは、何か裏にあるのではないか。」

(市長、神父以外のおとなたちが動揺。)

市長「証拠はあるのか？ハールメンが無実だという。」

ユーミ「だから、待って下さい。もう少し待って！」

(神父が市長に耳打ちする)

市長「よし、正午まで。正午まで待ってやろう。」

(舞台暗転)

(照明が明るくなる)

(昼のイメージ)

市長「神父、ただいまの時刻は？」

神父「午前 11 時 50 分なのです」

市長「ハールメン、そして若先生。あと 10 分で処刑を執り行うが、まだ我々の不正の証拠は見つかったかね？」

神父「見つかるわけがない。もともと、不正なんてないわけですしね。市長」

市長「若先生、わかってますな。ハールメンをかばった罪で、あなたも裁かれることを覚悟しておいてください」

神父「まあ、市長も私も人格者ですから、手荒いことはしませんよ」

ユーミ「ああ、神よ。真実や正義は無力なのでしょうか・・・」

(舞台暗転)

市長「な、なんだ!？」

(照明、雷・混乱のイメージ)

ハールメン「神が、神がお怒りになっている。神よ、罪深き人々にも慈悲を与え給え」

(ハールメン、すかさず笛を吹く)

(天井から二枚の紙切れが落ちてくる)

ユーミ「何かしら？」

博士「うん？セクシーキャバクラ”ヘブンズクラブ”の領収書って書いてあるぞ？」

大佐「あ、ほんとだ」

老人「こちらの領収書は料亭の領収書ですぞ。しかも芸者付、料亭貸切」

(ユーミが二人から領収書を受け取る)

ユーミ「セクシーキャバクラのが 9500 ドル、料亭のが 9500 ドル」

老人「合わせて 19000 ドルの領収書」

市長「ハールメン、営利誘拐のみならず、昨夜は芸者とセクシーキャバクラで豪遊か！」

神父「うらやましいぞ！」

ユーミ「ハールメンさんの手持ちは、200 ドル」

神父「こいつ、一晩で使い切りやがったぞ。大事な 2 万ドル」

市長「もう言い逃れはできないな。処刑を執行するぞ、大佐」

大佐「ちょっ、ちょっと待ってください。ハールメンは子供連れで料亭に行き、セクキャバに行ったのは、おかしいぞ??」

市長「どこが、おかしいんだ？」

大佐「ハールメンを捕まえた場所にたどり着くためには、子供の足で約半日はかかりますぞ」

博士「うむ」

大佐「ネズミ退治が終わったのが、夜 22 時ごろだったと思います」

博士「確か、そうだったな。1 時間ほど祝杯をあげて、家に帰ったら、小谷真生子が TV に出ていたからな」

大佐「それで、ハールメンを逮捕したのは、朝 9 時」

博士「朝、起きて子供がいなくなっていたのに驚き、緊急会議を行ったのが朝 6 時だった」

大佐「すると、ハールメンが逮捕した時点に到達をした時刻を朝 9 時とするなら、逆算してこの町を出るのは、午前 5 時前でないといけない」

博士「その計算は正解ですな」

ユーミ「この領収書には、「お帰り時刻 5:30」っていう刻印がされているわ」

博士「そうすると、5:30 にセクシーキャバクラに行っていた人は別人ということになるな」
(市長・神父が気まずそうにしている)

大佐「市長、ハールメンの処刑命令を、一時中止してください。公金横領罪に問われるべき人間は別人物かと思われます。すぐに捜査命令を」

神父「いや、公金横領と営利誘拐は別の罪。ハールメンを神の名の下に即刻処刑すべきですぞ、市長」

ハールメン「誘拐だと。子供たちを連れて行ったのは、市長も了解したんだぞ」

市長「うーむ。もう少し時間の猶予を作ろう。夕方、もう一度集合だ」

(市長・ハールメン以外、退場)

市長「ハールメン、取引をしないか」

ハールメン「やっぱり公金横領はお前たちか」

市長「あまり大きな声で言うものではない。全ての罪を神父に被せる。神父が2万ドルを君から取り上げ、使ってしまったようにするんだ。それに怒った君が子供たちを連れていってしまった。これでどうだ？」

ハールメン「市長、あなただけが罪を被らないというわけか」

市長「全て神父が悪い。君が激情して子供たちを連れて行ってしまった気持ちもわかる。そこは情状酌量の余地がある。神父の財産を没収し、その内2万ドルと慰謝料1万ドルを君に分けよう。また、子供たちから天然痘の免疫体を収集する権利も与えよう。どうだ、悪くない条件だろ。君が、神父に2万ドル取られたという証言をするだけでいい」

(市長、退場、入れ替わりに神父が入ってくる)

神父「ハールメンくん、大変だっただろう。さあ、これを食べなさい」

ハールメン「いきなり、どういうことですか？」

神父「僕は市長と違って君を助けたい。だから、そのアドバイスをしに来た。市長に全ての罪を被せてしまうんだ。いいですか？2万ドルは市長に没収されてしまい、その代わりに子供たちを勝手に連れて行けと言われた、それだけ証言すればいい。あとは、私がうまく市長を追及し、彼を市長の座から追放する。町で一番の人格者である私が市長となり、君の無罪を神の名の下に決めるだろう。全て神のご意志だ」

(神父が退場)

(照明暗転、スポットライト)

ハールメン「えー、これで全てがはっきりしました。昨日、19000ドルを使ってしまったのは、市長と神父です。おそらく、セクシーキャバクラ“ヘブンズクラブ”の方が神父、料亭の方が市長でしょう。あ、もうわかってるって？それは失礼をしました。さて、全ての罪を私に被せようとはしましたが、それでは済まない状況になってきたので、お互いに裏切った。まさに囚人のディレンマ・ゲームというべきでしょうか。ハールメンでした」

(登場人物全員が入場)

(照明は夕方っぽく)

市長「これより、最終審議を行う。まずは博士論点の整理を」

博士「まず争われるべきは、ハールメンが子どもを連れていったのは、誘拐にあたるかどうか、もう一点は、19000ドルという公金の横領をしたのは誰かということです」

市長「大佐、証拠品を提出を」

大佐「証拠は、この領収書2枚です」

市長「この証拠から判明される推論は？ 博士」

博士「この物証から判明される推論は、ハールメンと公金横領犯は別人であるということです」

市長「さて、ハールメンくん。最後に君の証言を聞こう。ノーティス・アンド・ヒアリングだ。私が君に渡した 2 万ドルは、誰の手に渡った。そして君はなぜ子どもを連れていった？」

神父「ハールメンくん、神の名の下において、真実を申し上げなさい」

市長「ハールメンくん、どうぞ」

(しばらく、沈黙)

市長「ハールメンくん、どうした」

神父「さあ、君は誰かに罪を被せられてしまっているんだぞ。このままでは処刑されてしまうのだぞ」

ハールメン「真実を申し上げます」

(市長と神父同時に)

市長「やはり神父か？」

神父「やはり市長か？」

ハールメン「私は最初から 200 ドルしかもらっていない。また、子どもたちも私が笛を吹いたら、自然についてきただけだ」

(子どもたち出てくる)

メッシュ「じゃーん！！」

レイベント「けーん！」

フィッシュ「ぼーん！」

市長「ここは子どもたちが出てくる場面ではない」

神父「向こうで遊んでなさい」

メッシュ「大佐さん、もう 2 枚、証拠写真でーす」

大佐「うん？ これは、市長が料亭で芸者遊びをしている写真と神父がセクシーキャバクラで遊んでいる写真ではないですか！」

市長・神父「な・なに！」

フィッシュ「あと、証人も連れてきたよー。博士さん、いいですか」

博士「いいだろう」

市長「待て、私が裁判長だぞ！」

芸者「あら、市長はん。お元気ですこと。おとといの夜は、あれだけ盛り上がりましてけど、お金持ちどすなー」

キャバクラ嬢「神父ちゃん。おとといはありがとね。でも、あれだけお金遣わしちゃったけど大丈夫？」

市長・神父「話は後で聞くから、向こうで待ってなさい」

老人「公金横領の犯人は、どうやらはっきりしましたな」
博士「ええ、そのようです」
大佐「市長と神父を逮捕しましょう」
博士「もう一件、誘拐の件だ。これについても子どもたちに聞いてみるか。ユーミ先生聞いてもらえますか？」
ユーミ「はい。メッシュ、レイベント、フィッシュ、あなたたちはなぜハールメンさんについていったの？」
レイベント「僕らの中にある天然痘の免疫が他の町の子どもたちを救えるのであれば、その免疫を提供することをみんなで決めたい」
フィッシュ「その免疫を抽出するのは、峠の向こうにある診療所に行かないといけないので、朝までには帰ってこようということで、出かけたんだい」
メッシュ「でも、レイベントの奴が、途中で足をくじいちゃって、それで立ち往生ってわけさ」
博士「つまり 19800 ドル分のあるものというのは、子どもというより」
ユーミ「天然痘の免疫体だったわけですね」
ハールメン「・・・」
大佐「子どもたちも納得の上での行動か」
老人「誘拐ではないですのー」
ハールメン「あと、2 万ドルあれば、天然痘の治療薬が作れる。しかし、市長と神父に騙された。そこでやむを得なく、子どもたちに協力をしてもらい、彼ら、いやこの街のみなさんの持つ免疫体を提供してもらうことにしたのです」
ユーミ「ハールメンさん、それなら早く言ってくだされば良かったのに」
博士「そうです。私たちの街はあなたに救われたのです。他の街を同じように救うならば、あなたに私たちは協力しますよ」
ハールメン「ありがとう。ありがとう。」
-こうした街の住人たちは、彼らの持つ天然痘の免疫体をハールメンに提供したのです-
-えっ？市長と神父がどうなったですって？それはもちろん財産を没収された挙句、街を追放されてしまいましたのです-

(チャルメラの笛の音が、だんだん大きく最後には劇場いっぱいに鳴り響く。)
(照明、スポット)

ハールメン「この音が鳴り響くとき、世界中の子どもが泣きやみ、この音を歓迎する。この音が聞こえたとき、あたかも救世主が誕生したかのように、祝い喜ぶ人々がいる」
ユーミ「困ったときは？」
全員「ハールメンにおまかせっ！」

(了)